

キヌサヤエンドウの新品種‘さつま白花’‘さつまひかり’の育成

池澤和広・*軽部 稔(鹿児島県農業試験場・*鹿児島県バイオテクノロジー研究所)

Kazuhiro IKEZAWA and Minoru KARUBE: Breeding of the new Varieties 'Satsumashirobana' and 'Satsumahikari' on Pod Pea (*Pisum sativum* L.)

鹿児島県におけるキヌサヤエンドウは、7月～5月の長期にわたって栽培されており、その中心は10月～4月に収穫する作型である。現在の主要品種であるニムラ赤花2号は、多収性であるが莢色は淡く、莢のうねりも生じやすいという品質的な欠点と開花期前後に葉先枯れ症が発生しやすいという生理的な欠点を併せ持っている。

筆者らは1984年から、良質多収で気象の年次変動に左右されにくい、栽培容易な暖地型品種の育成を目標に育種を開始し、当初の目標に近い系統を得たので、その育成経過と特性の概要について紹介する。

1. 育種経過

1984年、鹿児島県農業試験場において本県で育成したか系11号及びか系20号を母、同じく育成中の系統58-5を父として人工交配を行った。F₂、F₃は雑種集団栽培、F₄で個体選抜、F₅、F₆でさらに選抜を進め、F₇(1986)で遺伝的に固定したと思われたので、その後、生産力、特性等について検討した。その結果、1991年有望な2系統を得たので、‘さつま白花’‘さつまひかり’と命名し、種苗法による品種登録の出願申請を行った。

2. 特性

‘さつま白花’は早生で半矮性の品種である。花色は白で1花房の花数は2花性である。草丈はやや高く、節間長はやや長い。初花房節位は12節前後で、低節位から開花する。莢長は短く、莢幅は狭い。莢重はニムラ赤花2号と同程度で軽い。莢の形状は板状で、そり・うねりがなく、莢色の濃い良質の品種である。また、収量性も高く、L莢率も高い。

‘さつまひかり’は早生で半矮性の品種である。花色は白で1花房の花数は2花性である。草丈はやや低く、節間長は短い。初花房節位は11節前後で低節位から開花する。莢長は短く、莢幅はやや広い。莢重はニムラ赤花2号より重い。莢の形状は板状で、そり・うねりがなく、ブルームレスタイプで莢色の濃い良質の品種である。また、収量性も高く、L莢率も高い。

3. 適応作型

秋まき冬・春どり作型(ハウス作型を含む)

第1表 生育・収量調査

項目 品種名	草丈節数		初花房着生節位		着莢節間長		収量同左比	
	cm	cm	節数	枝長	節数	cm	kg/a	
さつま白花	283.0	57.7	12.3	44.7	43.2	5.0	239.5	127
さつまひかり	190.4	49.2	11.1	29.7	38.2	3.9	214.1	114
初 姫	215.7	49.2	19.9	69.6	29.6	4.4	178.9	100
ニムラ赤花2号	217.5	48.5	11.0	29.6	37.0	4.5	219.0	117

注)秋まき冬どり(ハウス)作型、平成2年9月27日播種

第2表 莢の調査

項目 品種名	莢の調査				
	莢重	莢長	莢幅	莢厚	莢色
	g	cm	cm	cm	
さつま白花	1.57	6.8	1.41	0.33	B4
さつまひかり	1.80	7.1	1.47	0.37	B4
初 姫	1.65	7.6	1.41	0.35	B3
ニムラ赤花2号	1.62	7.7	1.42	0.33	B3

注) 調査日:平成3年1月18日

莢色:富士葉色カラースケールBシリーズ(野菜用)
B1(淡い)~B5(濃い)